

NETWORK

2部屋(2K)の住宅に1泊5,000円で
ファミリーリゾートをしませんか……というユメ…………… 2
NIRA 助成研究報告③「高齢者はなぜふるさとを離れたのか」
気候条件や地域の条件をカバーした住まい…………… 5
「変貌する住宅需要構造」…………… 7
—三宅醇豊橋技術科学大学教授の講演—
博多ごりょんさんのまちづくり～地域ゼミより…………… 6
地域データ散歩③ 若者定着の様子～福岡市…………… 10
地域計画のための一知半解事典④
地域の住宅建設を担う大工・工務店の動向…………… 12

見・聞・食

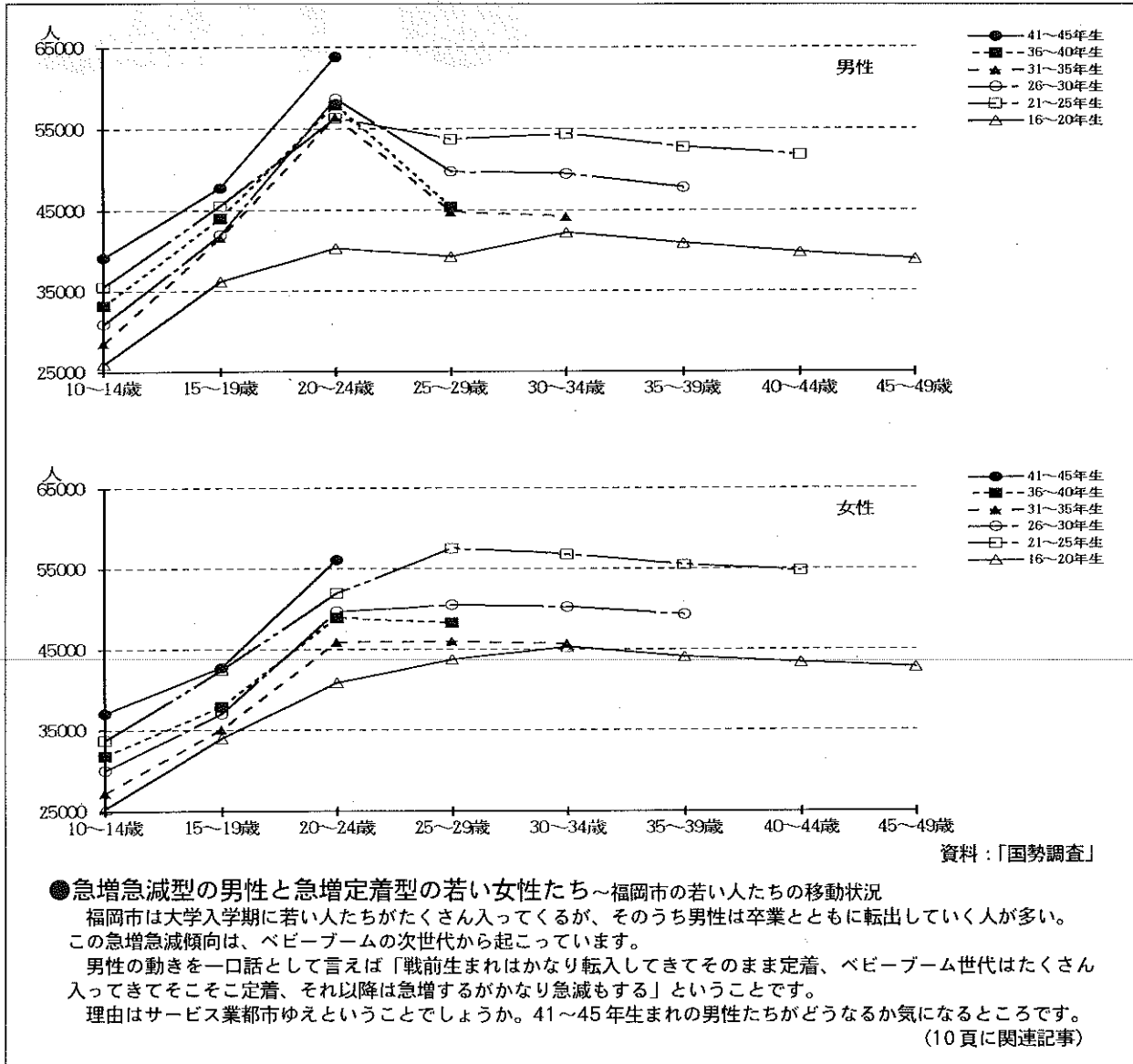
鴨緑江の南岸を見る(中国遼寧省)…………… 13
津屋崎町農業体験実習館オープン…………… 15

近況

「学術研究都市と計画行政」
日本計画行政学会九州支部久留米大会…………… 16
所員近況…………… 17

本・BOOKS

「音の晩餐」林 望 著…………… 19



●急増急減型の男性と急増定着型の若い女性たち～福岡市の若い人たちの移動状況

福岡市は大学入学期に若い人たちがたくさん入ってくるが、そのうち男性は卒業とともに転出していく人が多い。この急増急減傾向は、ベビーブームの次世代から起こっています。

男性の動きを一口話として言えば「戦前生まれはかなり転入してきてそのまま定着、ベビーブーム世代はたくさん入ってきてそこそ定着、それ以降は急増するがかなり急減もする」ということです。

理由はサービス業都市ゆえということでしょうか。41～45年生まれの男性たちがどうなるか気になるところです。

(10頁に関連記事)

2部屋 (2K) の住宅に1泊5,000円で ファミリーリゾートをしませんか……というユメ

〈ストック活用拘泥り記一起の巻〉

この物語は「起の巻」で消えそうになっている。
しかしもう少し拘泥ることによって承・転……とつ
ながらないかという悪足騒ぎを述べてみたいと思う。

●大量の空家群が見つかった

発端は2年前。対馬の厳原町の仕事のお手伝いで、町
内を案内していただいた時、突如眼前に現れたコンク
リートの中層住宅群から始まった物語である。

「あれは空家じゃあないですか。何なんですか。」

「町の住宅です。入っているものもありますよ。」

という調子でいろいろ聞いてみると、次のような事
情で公営の空家が大量にできているということがわか
った。

- ・もともと亜鉛の鉱山があって、その鉱山住宅があっ
たが、それが昭和40年代に「住宅地区改良法」によ
って、5階建に建て替えられた。
- ・ところが、192戸の建設が終わる頃には鉱山が閉山に
なってしまうと、住宅の需要は途絶えてしまった。つ
まり今後の入居の見込みはなくなった。
- ・現入居は35戸ぐらい（一部2戸を1戸に合わせて広
い住宅にしたので、現総戸数は176戸）。

●ゆっくり滞在型のリゾートができるぞ？

このことがわかって、というより現地で空家住宅群
を見た途端に、早合点型の粗雑な私の頭の回転が始ま
った。



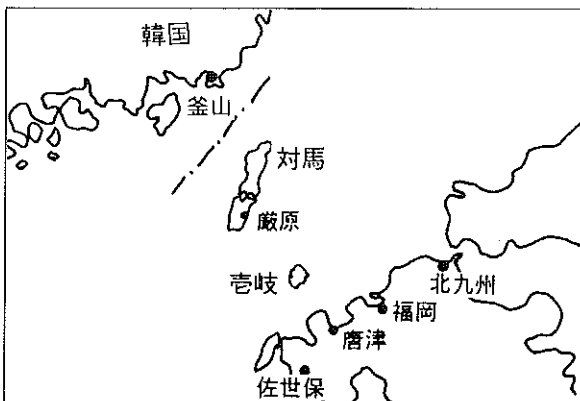
空き家になっている公営住宅

- ・これを住めるようにして、1泊5,000円ぐらいで貸す
ようにすると、福岡の大学生やゆっくり滞在型のリ
ゾートを楽しみたい家族連れなどは、すぐに行きた
くなるのではないか。
- ・魏志倭人伝に出てくる對海國（対馬）と一大國（壱
岐）への観光客は、壱岐が90万人あるのに対して、
対馬はその半分の45万人である。
- ・その理由は交通費の違いにある。例えば、普通車の
フェリー運賃が対馬では25,240円、壱岐では9,990
円の違いがある（時間は4時間半と2時間10分の違
い）。
- ・仮に4人家族で対馬へいくとフェリーで25,240円
（車）×往復+3,520円/人×3人×往復=71,600円
となり、1泊1万円/人のところに泊まったら合計で
111,600円ということになる。1人当たり1日27,900
円の豪遊ということだが、なんだか割に合わないよ
うに思う。
- ・2泊にしたところで、1人1泊当たり18,950円にな
ってしまう。問題は対馬に渡る交通費が高いことが
問題とも言える。

一人当たり運賃

フェリー（4人）	往復	約18,000円(車込み)
飛行機	〃	18,000
ジェットfoil	〃	13,000

対馬の位置





対馬の北端の殿崎にある東郷平八郎書の記念碑
日露戦争のときロシア兵142人がボートにのって上陸したところ（上対馬町）

- ・この問題を解決するには不幸と嘆いたり、交通機関に文句をつけても当面の解決にならない。方法は唯一、長期滞在をして、ゆっくり対馬を楽しんでもらって、来訪者に割安感をもってもらうしかない。

●対馬の魅力を少し

- ・司馬遼太郎が「坂の上の雲」で祖国防衛戦争だったという日露戦争の気分を感じていただくには対馬に行かねばならない。
- ・今、沖縄がいろいろ問題になっているが、辺境は常にきびしいのである。対馬についても、先に述べた住宅のあるすぐ近くの小茂田浜が、文永11年（1274）10月、90隻の船に分乗した元寇の襲来を受け、守護代宗助國以下主従80騎で防戦に努めたが、全員討ち死にした。この辺りにいくと、日本が常に侵略ばかりしていたように言って懺悔をくり返す人たちの話はリアリティがないように見えてくる。
- ・楽しい話を書くと、12月に寒ブリを注文すると年末に届けてくれる。1本あると小家族ではなかなか食べきれないので、近所にも配ることとなり楽しみが広がる。ミズイカという水っぽそうな名のイカがまたうまい。これはアオリイカのことで、色素胞を収縮しているときは透明に見える。少々高価なものではあるが、対馬で食べれば堪能できる（都会風の格好つけた店でないところに入った方がよい）。

- 1泊5,000円の住宅が100戸使えるようになると先に述べた家族型のリゾート旅行をフェリーで行くと、1人18,000円の経費がかかるが、6泊すると、1泊当たり3,000円になる。1週間あれば、日露戦争の跡も、美しい多島海も、天気が良ければ韓国の望見も、うまい魚や対馬の食事も、民俗資料となっている風景も楽しむことができる。



対馬・厳原町椎根の石屋根
穀物を貯蔵した倉庫、床下を風が通りぬけるようになっている



石屋根の先端

- ・一応、4人で1泊5千円の宿泊費として1週間の試算をしてみる。
1泊4人で（1万円／泊・人の場合）111,600円、1週間6泊を計算すると111,600円+5泊分200,000円で311,600円となる。住宅を使った6泊の場合は30,000円（5千円×6泊）、1人1日4,000円程度の食費・燃料費等をみて（4,000円×4人×6日＝）96,000円と71,600円のフェリー運賃で、合計197,600円で、1家族が1週間ゆっくりできる。
- ・こういうことが増えると、いずれは運賃も下げるようになるに違いない。

●ところで、今までの顛末は

- 「曰ク、目的外使用はいけない」
- 「仮に用途廃止（公営住宅でなくする）しても、用途として不必要になったのだから、そのまま使うことはできない。取毀す以外のことはできない」
- 「仮に払い下げが受けられても、残存価値で買い取ったりしたら、とても5,000円で借すというような活用はできない」

不可能証明指向症候群という、精神面における「自己と非自己の区別ができなくて、何でも受け入れてしまつて同調してしまう」というエイズのような症状が

増えている。

「結局、今のまま放っておくしかないのだ」などと、町や県や東京の方でサジェスションをいただいた。そういうわけで2年近くたってしまった。

しかし、「国の金が出ている住宅を放置しておくのはおかしい」という素朴な気分で、「もったいないという気分は憲法よりえらいのだぞ」とか「憲法の方が各法律よりえらいのだから」などと少々なぐさめながら、機会あることに遠慮勝ちに尋ねてきた。

結論は簡単であった。

「入居者がなく、かつ、将来とも……保有する必要がないとき……改良住宅等の……用途を廃止することができる」のである。このことは担当課で確かめた。もちろん、税金が投入された施設であるから、それにふさわしい管理や活用をしなければならない。

●今後時間をおいて、検討するということも含めて考えてみたい

今後どうするかについては3点ほどの問題がある。

- ①ニードがあるか、客が来てくれるか。
- ②補修費と収入が、ほどほどのソロバンにのるか。
- ③地元の人たちが魚を売ったり、野菜を売ったりして稼ぐ気があるか。

現在のところ町の意見は「検討することも含めて考えてみたい」というような極めて慎重な態度である。国や県から出た話でないと自己責任が発生するから、どうしても慎重になる。それは、「リゾート」などという話になると、東京発の高級豪華指向の情報ばかりであるので、糸乗のいう「地元での楽しみが豪華であればいい、高級ホテルなどいらん。低級高品質がいいんだ」というようなことは、なかなか信用されない。私が話している間は、一応言葉では同感のような雰囲気にはなっているが、有名タレントや高名な学者が「デラックスとか豪華ホテル」とか言っているのに、もぐりのような人間の言う話では……ということがありありである。

ソロバンの方は、大雑把に言うとして下記のように考えられる。

・支出

仮に補修費を100万円/戸としておく。中を見えないので十分わからない。

・収入

5,000円/泊・戸×30日=150,000円。年間30日

入って15万円。夏休みが2ヶ月近くあるので少なくとも40日は客を入れねばならないと思う。夏休み以外にも少しでも泊めるとして、年間60日は可能かと思えるが、ここでは30日としておく。

15万円×10年>100万円となるが、経費もいるので、最低は30日の稼働が必要である。

●この物語は承・転とつながるか

ところで皆さんにお願いがある。

本当に高級デラックス以外の低級高品質に対して客はあるのか、ということについて御意見を聞かせていただきたい。

対馬は1週間滞在するだけの魅力は十分持つてはいらぬ。しかし、それは都会でいうようなデラックスホテルリゾートではない。島の味や島の雰囲気である。それも、少しずつ都会風に押されつつあるが、まだ十分納得させられるものもある。

一応ストップしているが、もし皆さんからの声が「低級(安い)高品質」でいいぞということであれば、またぞろ動いてみたいと思っている。(糸乗 貞喜)

「よかネット・ミニ編集」

「ワンポイント・ナウ」発行のお知らせ

よかネット1~20号までの記事を分野別に編集し、「よかネット・ミニ編集」をつくりました。

また、これまで業務の上でポイントになったことを外部にも発信したいと外部に思いから、小冊子「ワンポイント・ナウ」を発行しています。

ご希望の方はご連絡ください。

よかネット・ミニ編集 ナンバー

- ① やぶにらみ九州論
- ② 地域づくりと産業
- ③ 住宅・高齢化・福祉
- ④ 学術研究・文化

ワンポイント・ナウ バックナンバー

- No.1 失敗しないための「3セク」計画論
- No.2 公共賃貸住宅総合再生計画(建替事業のマスタープランに係わる事項)策定の視点
- No.3 市町村の将来フレームの設定手法について
- No.4 地域づくりのための産業政策
- No.5 “モモの村”構想-高齢者・障害者施設を、ファクトリーパーク等の組み合わせによって地域産業・先端産業のモデルとして考える-
- No.6 これからの住宅施策の視点-市町村住宅マスタープラン策定にあたって-

NIRA 助成研究報告③

「高齢者はなぜふるさとを離れたのか」

気候条件や地形条件をカバーした住まい

研究がスタートした頃、研究チームで現地調査の対象市町村をどこにするかの議論において、「過疎地は人口移動が激しいだろう」という意見が大半だった。そこで過疎地についての情報を仕入れようと、大学の図書館に行って「日本の過疎地帯」(岩波新書、1968年初版、今井幸彦編著)という本を借りてみた。

それには、僻地や気候条件の厳しいところでは、過疎化が一段と進行していると報告されており、このままいけば高齢者問題が20~30年後に顕著になる、とはっきり書いてあった。約30年前の「過疎」がまだ新しい言葉であった時代に、将来の高齢者問題を予測していた本が当時どのくらいあったのかは、よく分からないが、平成2年の国勢調査でみると、確かに昔から過疎化が進んでいるところは、自然条件や地形条件が厳しく、高齢者の転出が非常に多くなっている。

今回は過疎地の地形条件、気候条件に対応した、住まいのあり方について感じたことを報告する。

●気候条件、地形条件の厳しさが高齢者の生活サポートを阻む

鹿児島県の最北に位置する大口市は、市域面積291km²とかなり広い(参考、福岡市336km²、大阪市212km²)。標高の高い山地が連なる内陸性の盆地である。内陸部であるため、夏季は酷暑の日が続く一方、冬季には-10℃位まで下がる日が続き「鹿児島の北海道」ともいわれる地域である。この山地が続く広大な市域と、夏期の酷暑、冬期の厳冬が、高齢者の生命に及ぼす影響は大きく、実際に大口市の高齢者の死亡率は、夏期、冬期が他の季節と比べ極めて高い。

ここは北薩摩地域の拠点的な都市で、医療施設などの整備は比較的進んでいるが、地形条件、気象条件に加え、過疎型の人口構造になっていることが、高齢者福祉の推進においていろいろな点で障壁になっている。例えば、パイロット事業として取り組んでいる給食サービスが、車1台で1時間半かけてやっと10軒程度しかできないのは、集落が市域のあちこちに点在しており、移動時間が大半を占めるからである。市の高齢者福祉

担当者も「都市型の高齢者サービスを過疎地で同じようにやろうとしても難しい。地形条件を考慮した方策はないか……」と悩んでいる。

同じ様な話は笠沙町(鹿児島県)でも聞かれた。ここは三方が海に囲まれた半島で、平地が全くない地形である。海岸線のすぐ側まで山がせまっておき、ここの高齢者は、車の入れない険しい道を一步一步登って田畑の作業や買い物に出かけていく。ここでも保健婦さんの定期検診などが難しいといわれるのは、やはり地形がネックになっている点にあった。

●過疎地では自立支援の選択肢が少ない

高齢者の人口移動を追ったこの研究では、田舎から都市への転出が、必ずしも高齢者の精神的な自立が確保された状態で行われているのではなく、生活の不安からやむを得ずに住み慣れたところを離れるということが問題ではないかと思われた。高齢者の移動圏域のパターンとしては以下のように考えられたが、aが最も望ましいのは言うまでもない。中でもa-1が最も良いが、同じ生活圏内であれば移動にかかる精神的な負担はまだ少なくすむ。

〔高齢者の移動圏域〕

- a 生活圏内での暮して従来の地域社会とのつきあいが続く
 - a-1 今までの暮らしを続ける
 - a-2 集合・共同の家で暮らす
 - a-3 施設へ入所
- b 様子見圏域で親族もサポート(上記のaタイプとの結合)
- c 生活圏外への移動
 - c-1 親族の家
 - c-2 施設へ入所

bは本誌21号でも紹介したが「車で2~3時間で親を見に行ける距離で、普段は地域社会で生活させ、何かあってもすぐに飛んでいける圏域」である。①高齢者と子供がお互いを気に掛けながら自立した生活が過

NIRA 助成研究

「高齢者はなぜふるさとを離れたのか」の報告書ができ上がりました。

印刷実費として一部1,000円で配布しておりますので、ご希望の方は当事務所までご連絡ください。

せる、②孫などにとっては、祖母・祖父の家がリゾート的なものにもなれる、などの利点が生み出せるものではないと思われる。

cは今回調査した限りでは、生活環境の激変を伴うため、いろいろ問題を生じるケースが多かった。

今回テーマにしている、地形的な条件が厳しい過疎地では、自活力が落ちた高齢者は、選択の余地なく施設に入所するか都会の親族に引き取られるということも多く聞かされた。地形条件の厳しさから24時間の巡回介護サービスの提供も難しいものと思われ、自立支援の選択肢は少ないとみられる。

●公的サービスを拒む高齢者も意外に多い

サービスを受ける方の高齢者の気持ちはどうかということもヒヤリング調査などで聞いてみた。在宅の介護サービスやヘルパーさんの派遣に対しては、「他人が知らない間に勝手に上がってきて嫌だ」と拒むケースや、施設入所についても「役所の世話にはなりたくない」といって老朽化した家で暗い電灯一つの明かりの下、寝たきり生活を選択する独居老人も多い。ただし、これらは全ての高齢者にいえることでは決してなく、生活に対する不安と自活力の低下から、公的なサポート

を望む高齢者も多くいる。自立支援サービスとの付き合い方が、わが国ではまだ十分に浸透していないことから、今後、自立した生活のために必要な生活サービスを受けることに対しての慣れが必要と思われた。

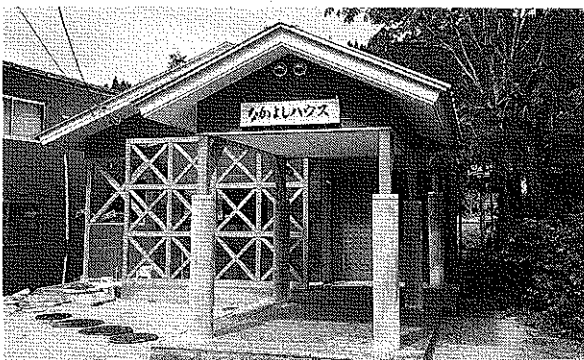
●不安解消型の季節や夜間だけの共住型の住まい

高齢者の自立を助けながら、高齢者の意向にできるだけ沿った住まい方の一つとして、共住型の住まいづくりが行われている。阪神大震災の後、独居高齢者の安全と生活の安定を図るため、新しい居住形態としてコレクティブハウジングの試みも幾つか進められており、その成果は徐々に現れつつあるといわれる。

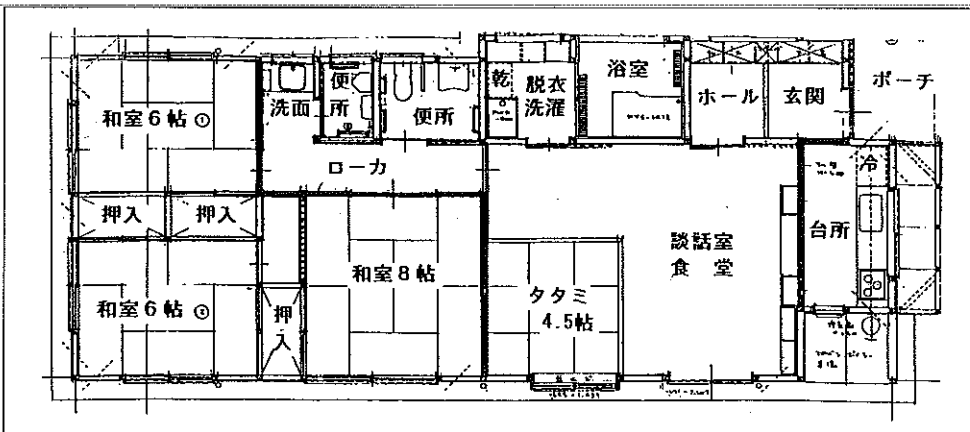
同じような共住型の施設として、岡山県の鴨方町にある「サニーハウス鴨方」は、農村地域における「独居高齢者の夜間の不安解消」のための共住型施設であり、今回の調査研究で、同施設での居住者ヒヤリング調査を行った。この施設は岡山県の単独事業「ひとり暮らし老人共同生活支援施設」によって整備されており、同事業によって岡山県内では空家活用型、小規模ホーム型の2種類の共住施設が数カ所出来ているが、この「サニーハウス鴨方」は6室の居室をもつ小規模ホーム型である。

ここの特徴は、共同生活で居住者がお互いに助け合いながら生活をする点であり、日常の生活に加えて、交流室や隣接する在宅介護センターなどによって、寂しさや孤独感、急病や事故の際の不安が大幅に解消されるなどの効果がみられた(ちなみに下の間取り図は、同じ岡山県内の加茂町の施設のもの。ここは元県営林所宿舎を活用している)。

一方、今までの生活スタイルの違う居住者が相互にその違いを認め合わないと、なじめない人も多く、掃除や食事の用意など、それまで慣れてきた生活環境を



岡山県加茂町「ひとり暮らし老人の家」



「ひとり暮らし老人の家」の間取り
談話室兼食堂が広く確保されている

「サニーハウス鴨方」の施設概要

市町村の概況	岡山県鴨方町 ・65歳以上人口3,560人 (H7年) ・高齢人口比率18.2%
入居状況	・定員6人 ・入居者4人 (男1、女3) ・町が公募し、個別に話し合っ決定
運営状況	・管理運営は町直営 ・平成7年4月20日運営開始 ・緊急通報先は隣接の在宅介護センター
運営内容特色	・都市部と農村の独居老人に対するモデル施設として整備 ・野菜などの共同栽培
施設内容	・建物324㎡ ・設備 (食堂、厨房、浴室、便所、倉庫、緊急通報装置、交流室)

変えてまで入居はしたくないという人も多いという。しかし、地形条件が厳しい過疎地の場合、冬期の厳しい寒さの時や夏の酷暑の時期、高齢者が体調を崩しやすい時に、少なくとも健康面の不安を感じないで暮らすことができる住まいがあって、夜間は共住施設で寝起きし、日中は自分の家に戻ったり都会に出たりと好きなことができるという、フレキシブルな共住スタイルも過疎地での選択肢の一つになると思われる。これであれば、介護など生活サポートを行う方にとっても、安心して様子を見ることができ、自分の生活スタイルを他人に崩されたくないという高齢者にとっても、比較的受け入れられやすいのではないと思われる。さらに、空家を利用することでの対応も可能であり、住宅ストックの活用というメリットもある。

●住まいや生活サポートなど、地域性に根付いたビジョンが必要

今回、過疎地の住まいについて取り上げたのは、地域の気候や地形などの条件に適応した高齢者福祉の取り組みが必要であると感じたからである。どこに行っても「新ゴールドプランで数値目標はこれこれです」ということを聞いたが、実際にこれを実行する場合には、冒頭に挙げたように地域の地形や気候の条件があって、これに対応した取り組みがもっと議論されて良いように思えたからである。この場合、住まいとソフトサービスと、地域の基幹産業などを総合した地域のバランスが最も重要であり、このバランスを良くすることが高齢者福祉だけでなく、住宅や雇用の情勢を明るくするものと思われた。

(尾崎 正利、糸乗 貞喜、山田 龍雄)

「変貌する住宅需要構造」

—三宅醇豊橋技術科学大学教授の講演—

現在、小社の会社案内の表紙となっている年齢階層毎の人口から考える住宅需要推計(よかネット22号12頁参照)をやってみたことをきっかけに「もっと詳しい方に話を聞いてみよう。できれば多くの人にも一緒に考えてもらったらどうか。」ということになり「住宅需要構造」について研究を重ねてこられた三宅先生をお招きしての講演会を行いましたので、その概要を報告します。

●負の需要

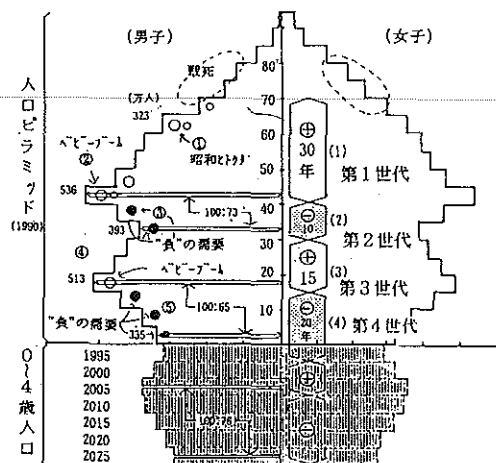
昭和46年に東京都の住宅白書作成のメンバーとして参加していた頃の住宅事情の予測では、東京は木賃アパートが増大し、とんでもないことになると思っていたが実際はそれほどでもなかった。また名古屋の住宅審議会で「最近借家のフロー(着工)の伸びがすごい借家のストックが増えないのはなぜか」という質問がでた。また、昭和50年頃、公団の抱える大量の空き家が問題となっていた。この原因もはじめははっきりとは分らなかったが、「負の需要」ということで考えを当てはめるとその原因が分かりはじめた。

●需要という言葉の2つの観点

住宅事情は当然経済情勢と深い関わりがあるが、景気が上がらなければ上がらないの住宅需要がある。日本語の「需要」という言葉には「ニード」(Need)、

人口ピラミッドと0~4歳人口(予測)

1990年: 国勢調査 1995~2025年: 人口問題研究所



「ディマンド」(demand)という2つの意味がある。前者は各個人が求める必要性、後者は価格、立地といった市場の条件の中での組み合わせから生まれてくるものである。

ディマンドは好不況といった経済状況に大きく左右されるが、ニードは各家族の各成長段階によって変化する。所得の増減に関係なく家族が増えれば住宅の規模が必要となってくる。そういったニードを捉えてどう政策化するかが政府や自治体などの公共サイドの役割である。

●人口構造からみた需要予測

東京が木賃地区とならなかった理由や、公団が空き家を抱えて四苦八苦した状況などの背景を自分なりに理屈立ててみようとした。これを人口構造に絡めて説明が出来れば、完璧とはならないまでも、ある程度の説得性を持って説明が出来るはずだと考えた。

将来の子供がどれだけ生まれるかははっきりとは分からないが、どれだけ生き残るかはかなり分かるようになってきた。地域も高度成長の頃のような大きな移動はみられないため、自然増、社会増である程度間違った人口予測が出来るようになってきた。

住まい方は世帯の成長段階に応じて変化し、求める住宅も変化してくるのは当然で、特に日本の住宅の需要状況は各年齢階層によって強く規定されている。

①24才以下：単身用借家需要層、②25～34才：世帯用借家需要層、③35～49才：前期持家需要層、④50～64才：後期持家需要層、⑤65才以上：老人住宅需要と大別できる。このような需要が年齢階層毎に生じているため、年齢別人口が増減するにつれて需要構造に変化がみられる。

人口構造上の特異点としてベビーブーム世代、第2次ベビーブーム世代があるが、このような突出した年齢階層が形成する需要の塊がスライドしていくことで、次期の年齢階層の需要量との差が生じる。この需要の山と谷から生まれる需要の減少が「負の需要」である。

東京が木賃アパート地区になると考えられたのはこの層が増えることに対する危惧であったが、1975年から人口の大都市への集中が止まりはじめたことがこの事態を変えたと思われる。公団の空き家騒ぎも次の新しい需要が展開しはじめたことで消えた。

需要が減少することで有効に使われていない借家ストックの淘汰作用がすすみ、このことが人口が増え続

三宅 醇 先生



ける東京でも、無限に同じような需要が続くようなことがなく、木賃アパートの問題がそれほどの問題ではなくなってきた原因だと考えられる。

●将来の展望

2010年を展望すると、前期持家需要層、後期持家需要層に挟まれて「負の需要」のサンドイッチ構造が持家需要に起こる。このことで地価が下がることになるかは定かではないが、上がることはないだろう。

そう考えると住宅を都市の機能としてどう制御していくかという本格的都市計画、住宅政策が可能な時代が来つつあるということが言えそうな気がする。

ベビーブーム世代が後期持家需要層になると、住宅の修理、建替え需要が発生してくる、ここでプレハブ業者と地元工務店・業者との競争が起きる。その地元業者をどう育成していくかを、各地方自治体が考えなくてはならない時期に来ている。(金川 薫)

博多ごりょんさんのまちづくり

～地域ゼミより

「ごりょんさん」という言葉にいろんな女性像を思い浮かべる人もおられるかと思う。たしか、以前「博多ごりょんさん物語」とかいふ短編テレビ番組があった。特に「博多ごりょんさん」といわれると、昔の大店の奥さんのイメージで、着物をピシッと着たような姿を想像する人が多いそうだが、単純な言葉の意味としては、結婚した女の人を指すのだそうだ。

その博多ごりょんさんを名乗る女性の方々が、博多部(那珂川と御笠川に挟まれた地区をそう呼ぶ)の人口減少や、小学校の統合問題等を抱えるなかで、花いっぱい運動や博多の料理教室などの活動を展開している。そこで、博多山笠をひかえた7月4日(木)(たまたま)の地域ゼミでは、「博多ごりょんさんのまちづく

り」として、博多ごりょんさん・女性の会会長の中村由紀子さんにお話をしていたいただいた。

●花いっぱい運動は「花ゲリラ」で

- ・福岡市長が平成2年に唱えた一区一美運動をきっかけに、博多区に地域検討委員会ができた。その中の住民側の女性3人が、女性の手でまちづくりをしようと「博多ごりょんさん」を発会した。
- ・博多部は企業や神社・仏閣が多く、住民とそれらが力を合わせてまちづくりをしないといけない。企業や神社・仏閣からも町内会費を取っている。
- ・まず花いっぱい運動を展開した。那珂川沿いの柵の外などに「花ゲリラ」のような感じで勝手に植えていき、市はそれを黙認するような形になっている。しかし市も時々肥料をくれたりする。
- ・行政は以前、公園は絶対に扱わせなかったが、今は公園もプランターで花いっぱいになっている。
- ・間伐材をもらってプランターケースを毎月50個作って配っている。花の苗は小中学校などから、土と肥料は全農からもらっている。
- ・最近自分たちの知らないプランターが増えてきて、活動が広がっているのを感じる。

●「げなげな話」の勉強会

- ・2~3ヶ月に一回勉強会を開いているが、なかなか成果をまとめられない。中身はいつも、あの人が何してる、こんな人がいるというような「げなげな話」。
- ・図書館がシーサイドももちに移転され、博多部からなくなった。文化の象徴として身近なところに図書館が欲しいと市にお願いしている。
- ・博多に残る古い町屋を保存してもらおうと市にお願いに行ったが、市は「記録保存している」という回答だった。
- ・町屋保存のために署名運動をし、NHKの番組で紹介してもらい、西日本新聞で記事してもらった。そのうち議員などからも問い合わせがあり、いつの間にか残されることになった。今は移築され、博多町屋ふるさと館として公開されている。
- ・これからは町屋で筑前琵琶や南坊流の茶会などイベントを開いて、中身を充実させていきたい。
- ・博多部には現在小学校区が4つあるが、児童数減少のためそれがひとつに統合されようとしている。
- ・冷泉小だけが統合に反対していることになっているが、その中の声の大きい人だけが反対している感じ。

博多ごりょんさん・女性の会 勉強会開催状況

年月	タイトル	講師
H5.3.	髷の巻物(1) いんがり、おえ	峰松 栄一
H5.5.	博多の歳時記	岡部定一郎
H5.6.	大博劇場について	武田 政子
H5.7.	博多人形の裏話	浦崎 マサ
H5.7.	髷の巻物(2) 髷の巻物	峰松 栄一
H5.8.	大楠様のお祭り	船越 安久
H5.9.	戦前からの町屋の暮らしぶり	舌間マサ子
H5.10.	宝照院	大岡重實・大岡良明
H5.12.	豊国神社と博多よもやま話	山崎 吉米
H6.3.	博多の南坊流	南坊流師家 松本清親
H6.5.	髷の巻物(3) 髷の巻物	峰松 栄一
H6.7.	山崎朝雲	一丸 綾
H6.10.	いけどうろうの話	吉貝総一郎
H6.11.	榑崎家の先祖にかかわる話	榑崎 半三
H7.5.	ごりょんさんの胆がけ神傳	長尾 トリ
H7.8.	大浜の話	中村 勇
H7.9.	博多のわらべ唄	内藤
H7.11.	明治以降の博多	吉貝
H8.1.	博多のことば遊び	岡部定一郎

公式な場では反対するが、個人的には仕方ないと思っている人も多い。

- ・新聞は4校区の文化の違いといていたが、そんなことはない。山笠の流れの違いともいわれるが、それも関係ない。
- ・今は、老人ケア施設と一緒にするなどいい小学校を作って欲しいと思っている。

●博多に山笠通りはなぜないか

博多のまちをめぐる興味ある話を種に、参加者からも様々な意見が出された。

- ・花は植えても植えても採っていかれるが、それがまたどこかで植えられてると思って、負けずに植えていかないといけない。
- ・博多には山笠通りというものはない。7月15日に追い山が終わると、パッと何事もなかったように普通に返るのが博多山笠のすごいところだから。
- ・福岡市政100周年の時に、名前を博多市に変えるかどうかの話が上がったが、意外にも反対意見が多かった。博多のイメージは暗いという理由らしい。
- ・博多は市の金をもらって山笠をやって、我が物顔でいばってるように見える。それでかえって他の区からは冷めてみられている。
- ・ここ2年くらい、駐車場だった所にマンションが建っ

てきた。一部のマンションには山笠があり、地元との交流もあるが、そういうところは少ない。

- ・博多は商売人の町というのが、実は他力本願で、再開発がうまくいったら乗ろうかと思っている。本当の商売人はいない。
- ・山笠が博多の風紀を乱し、地元の足を引っ張っている面もある。実は山笠はいやだ、という人も少なくない。
- ・博多はある意味でものすごく田舎、とも言われる。

(伊藤 聡)

地域データ散歩③

若者地域定着の様子
—福岡市の男性・女性

前号までは、いくつかの町をその地理的条件や産業的条件などによって性格分けするような形で人口定着の様子を見てきたが、今回は少し視点を変えて同じ都市の中での男女別の動きをみることにする。

●進学で一気に増え、就職で一気に減る—男性

まず男性であるが、近年は20~24歳をピークとするへの字型を描いており、その山の角度もだんだん鋭角的になってきている。この傾向は昭和50年以降にはっきり表れているが、それ以前はやや動きが違う。

その理由としてやはり大学の影響が考えられる。昭和30年頃の福岡市内には、大学は九州大、福岡大、西南学院大などいくつかしかなかったが、昭和30年から昭和40年代にかけて、九州産業大、福岡工業大など多くの大学が次々と開校している。それと同時に進学率も上昇し、大学のある福岡市内への20歳前後の人口流入が始まったと考えられる。

昭和50年以降、20~24歳人口は5歳階級ごとの他の年代をいずれも上回っており、データ上からも「福岡市は若者のまち」といってさしつかえないと思う。

しかし、問題はピークの後にある。25~29歳のときには1万~1万2千人も減少してしまっている。特に昭和31年生まれ以降では、15~19歳のときと同じくらいにまで減少しているということは、量的な問題だけでいうと約1万人(年間約2千人)が大学だけ福岡で過ごして次なる所(たぶんほとんど首都圏)へ行ってしまいうようである。これはやはり、地元で自分の能力を

活かせる(と思いこんでいる、を含む)就職の場が少ないためだろう。

●進学で増え、そのまま定着—女性

ところで女性の方をみると、男性のようなへの字型の傾向とは違っている。20~24歳まで増加していくのは男性と同じだが、その後は特に減少せず、横ばいで推移している。しかし、よくみると横ばい安定後の人口は男女ともほとんど同じで、男性だけにピークが訪れていることがわかる。

福岡市内の大学は、女子大学や短期大学についても昭和30年から40年代に多くが開校しており、そのこと自体の条件は男性と変わらない。しかし、短大など就学期間の短いものが男性より多いことと、地元就職意向が男性より強いことが男女の差となっているのではないかと思う。

ただ進学率の方が、女性は近年伸びて高学歴化しているため、今後は男性のようなへの字型傾向を見せるようになるかも知れない。

しかし、男女とも安定後はほぼ同じ人口になるということは、男性の就職の場がないとは一概にはいえない。大学などで研究を行うために多くの男性が集まったにしては、それに見合うだけの就職口がない、ということだろう。

先ほど「若者のまち」と書いたが、女性は必ずしも若い人は多くないので、人口データ上は「福岡市は若い男性のまち」ということに訂正したい。

なお、表紙のグラフと右のグラフは基本的に同じものである。表紙の方は何歳であるかを軸にとり、右の方はいつであるかを軸にとっている。言いたいことによって使い分けていってもいいが、見る側としてどちらの方が見やすいか、あるいは理解しやすいか、ご意見があればお願いしたい。

(伊藤 聡)

福岡市の定着率(男)

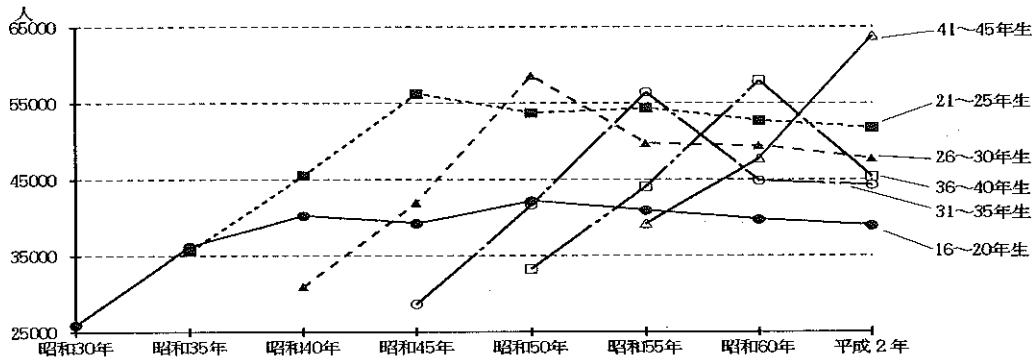
福岡市の定着率(男)

国勢調査	調査年	調査年	調査年	調査年	調査年	調査年	調査年	調査年	調査年
昭和30年	昭和35年	昭和40年	昭和45年	昭和50年	昭和55年	昭和60年	平成2年	昭和	
25,928	36,169	40,222	39,204	42,153	40,876	39,717	38,887	16~20年生	
100.0%	139.5%	155.1%	151.2%	162.6%	157.7%	153.2%	150.0%	21~25年生	
10~14歳	15~19歳	20~24歳	25~29歳	30~34歳	35~39歳	40~44歳	45~49歳	26~30年生	
	35,558	45,510	66,208	53,717	54,341	52,705	51,827	31~35年生	
	100.0%	128.0%	158.1%	151.1%	152.8%	148.2%	145.8%	36~40年生	
	10~14歳	15~19歳	20~24歳	25~29歳	30~34歳	35~39歳	40~44歳	41~45年生	
		30,902	41,897	58,596	49,682	49,419	47,719	46~50年生	
		100.0%	135.6%	189.6%	160.8%	159.9%	154.4%	51~55年生	
		10~14歳	15~19歳	20~24歳	25~29歳	30~34歳	35~39歳		
		28,554	41,586	56,386	44,737	44,157	44,157		
		100.0%	145.6%	197.5%	156.7%	154.6%	154.6%		
		10~14歳	15~19歳	20~24歳	25~29歳	30~34歳	35~39歳		
		33,221	44,009	57,912	47,724	45,336	45,336		
		100.0%	132.5%	174.3%	142.1%	136.5%	136.5%		
		10~14歳	15~19歳	20~24歳	25~29歳	30~34歳	35~39歳		
					39,147	47,724	63,790		
					100.0%	121.9%	162.9%		
					10~14歳	15~19歳	20~24歳		
						45,721	57,198		
						100.0%	125.1%		
						10~14歳	15~19歳		
							42,178		
							100.0%		
							10~14歳		

単位：人、%

平成2年国勢調査	
0~4歳	36,228
5~9歳	39,624

資料：「国勢調査」



福岡市の定着率(女)

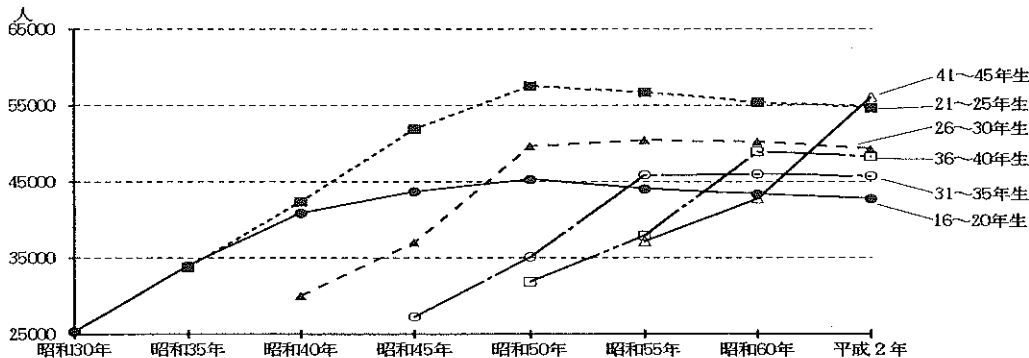
福岡市の定着率(女)

国勢調査	調査年	調査年	調査年	調査年	調査年	調査年	調査年	調査年	調査年
昭和30年	昭和35年	昭和40年	昭和45年	昭和50年	昭和55年	昭和60年	平成2年	昭和	
25,336	33,953	40,835	43,672	45,279	44,033	43,308	42,722	16~20年生	
100.0%	134.0%	161.2%	172.4%	178.7%	173.8%	170.9%	168.6%	21~25年生	
10~14歳	15~19歳	20~24歳	25~29歳	30~34歳	35~39歳	40~44歳	45~49歳	26~30年生	
	33,734	42,380	51,927	57,505	56,721	55,438	54,719	31~35年生	
	100.0%	125.6%	153.9%	170.5%	168.1%	164.3%	162.2%	36~40年生	
	10~14歳	15~19歳	20~24歳	25~29歳	30~34歳	35~39歳	40~44歳	41~45年生	
		30,010	36,993	49,631	50,427	50,197	49,246	46~50年生	
		100.0%	123.3%	165.4%	168.0%	167.3%	164.1%	51~55年生	
		10~14歳	15~19歳	20~24歳	25~29歳	30~34歳	35~39歳		
		27,212	35,067	45,846	45,964	45,685	45,685		
		100.0%	128.9%	168.5%	168.9%	167.9%	167.9%		
		10~14歳	15~19歳	20~24歳	25~29歳	30~34歳	35~39歳		
					31,837	37,881	48,884	48,268	
					100.0%	119.0%	153.5%	151.6%	
					10~14歳	15~19歳	20~24歳	25~29歳	
						37,072	42,722	56,072	
						100.0%	115.2%	151.3%	
						10~14歳	15~19歳	20~24歳	
							43,343	50,878	
							100.0%	117.4%	
							10~14歳	15~19歳	
								40,318	
								100.0%	
								10~14歳	

単位：人、%

平成2年国勢調査	
0~4歳	34,694
5~9歳	38,248

資料：「国勢調査」



地域計画のための一知半解事典④

地域の住宅建設を担う

大工・工務店の動向

平成7年度に佐賀県の地域工務店の調査研究のお手伝いをした。一言でいうと、地域の中小の旅館が、大手ホテルチェーンやビジネスホテルに押されてきた歴史、あるいは商店が、スーパーなどの大手資本に押されてきた歴史とほとんど同じ状況に、今の地域の大工・工務店は置かれていると思われる。今、建設業界、特に地域の住宅建設を担っている大工さん、工務店がどうなっているのかという点を、佐賀県と全国の住宅に関するランキングでいつもトップにあがってくる富山県の2県でみる。

●建設業は全産業の1割産業

建設業就業者は、平成2年度で全国の就業者6,170万人のうち約580万人、1割を占めている。昭和40年当時は、約330万人で、全就業者4,730万人の7%程度から徐々に増加、昭和55年までは順調に増加していた。これは、佐賀県、富山県においても同様な傾向である。しかし、建設業界全体はそうであっても、内部ではいろんな変化が見られ、特に住宅建設に関係している木造建築工事業、大工工事業など、いわゆる大工さん、職人さんなどの仕事をめぐる変化が著しい。

●小規模な事業所の減少は、廃業か、規模拡大

大工・工務店の変化に先だって構造が変化したと思

全産業就業者と建設業就業者の動き

単位：人、%

		昭和50年	昭和55年	昭和60年	平成2年
全	全産業	53,140,818	55,811,309	58,357,232	61,681,642
国	建設業 対全産業比率%	4,729,373 (8.9)	5,383,271 (9.6)	5,266,295 (9.0)	5,842,027 (9.5)
佐賀県	全産業	397,097	419,548	419,636	426,775
	建設業 対全産業比率%	32,475 (8.2)	41,145 (9.8)	39,416 (9.4)	42,458 (9.9)
富山県	全産業	560,400	575,495	579,923	594,080
	建設業 対全産業比率%	54,442 (9.7)	60,958 (10.6)	60,463 (10.4)	62,040 (10.4)

資料：「国勢調査」

旅館、その他の宿泊所事業所数の推移

単位：箇所

	S50年	S56年	S61年	H3年	50~56	56~61	61~H3
1~4人	78,427	75,537	69,471	59,722	▲2,890	▲6,066	▲9,749
5~9人	15,839	18,010	17,673	17,428	2,171	▲337	▲245
10~19人	6,542	7,267	8,044	9,728	725	777	1,684
20~29人	1,796	1,988	2,245	2,962	192	257	717
30~49人	1,266	1,440	1,589	2,032	174	149	443
50~99人	915	998	1,082	1,450	83	84	368
100~199	384	453	556	732	69	103	176
200~299	97	121	132	210	24	11	78
300人以上	81	92	113	162	11	21	49
合計	105,347	105,906	100,905	94,426	559	▲5,001	▲6,479

資料：「事業所統計調査」

われる宿泊業界の動向について触れておきたい。

国民生活に関する世論調査の、生活の力点をおく項目で、レジャー・余暇生活志向が住生活を追い越したのは昭和57年であり、海外旅行ブームといわれた時期である。これより少し遅れて国内旅行は、温泉ブームとなるが、この時期の旅館等の数をみると、小規模(1~4人)な旅館関係が急激に減少しはじめ、逆に中規模(10~19人)旅館等の増加が著しい。この時期の旅行需要者は、新人類と呼ばれた1960年前後生まれの女性達やニューファミリーと言われた団塊の世代であり、ブランド志向により各地のチェーンホテルなどが好まれ、旧態然とした小さな旅館などは敬遠されたため、廃業するか、規模の拡大あるいはビジネスホテル風に変化していった時期と考えられる。

●小規模な大工工事業の減少

地域の住宅建設を担ってきた大工さんは、職人気質で、営業を積極的にすることもなく、口コミでこれまで仕事を続けてきたと言われている。

しかし、佐賀県消費生活センターなどに持ち込まれる住宅に関する相談などをみると、需要者(ユーザー)、とくに若い人たちの不安の多くは、工事費などの金額がなぜそうなるのか、あるいは信頼できる業者かどうか、さらに希望を言っても反映してくれないなど、建設業者、大工さんに対する不信感である。裏を返せば、工事する側が、ユーザーに対して情報を十分に提供していない、客の要望に答えていないということである。そのため、新しく家を取得しようとする若い人たちは、営業力のある大手メーカーに傾いていくことになり、大工さんや小さな工務店などはますます仕事が減っていく。

●地域ビルダーへの期待

佐賀県の従業員数の推移 (S50~H3 増加数)

単位：人

	総数	1~9人	10~19人	20~29人	30人以上
建設業	5,941	2,096	4,734	494	▲1,383
総合工事業	2,198	1,857	2,907	▲514	▲2,052
一般土木建築工事業	▲13	164	355	▲271	▲261
土木事業(塗装、しゅんせつを除く)	2,675	1,025	1,928	195	▲473
塗装工事業	▲69	42	160	▲92	▲179
しゅんせつ工事業	72	▲13	▲10	46	49
建築事業(木造建築を除く)	▲792	179	198	▲295	▲874
木造建築工事業	325	460	276	▲97	▲314
職別工事業(設備除く)	1,934	▲685	1,393	585	641
大工工事業	▲814	▲1,085	156	76	39
びび・土・コンクリート工事業	809	223	212	194	180
鉄骨・鉄筋工事業	▲48	▲16	49	▲16	▲65
石・れんが・タイル・ブロック工事業	▲59	▲103	21	23	0
左官工事業	▲261	▲401	190	▲69	19
瓦葺工事業(金網屋根を除く)	224	66	124	0	34
板金・金物工事業	100	25	49	26	0
塗装工事業	653	235	226	95	97
その他の職別工事業	1,330	371	366	256	337
設備工事業	1,809	924	434	423	28

資料：「事業所統計調査」

富山県の従業員数の推移 (S50~H3 増加数)

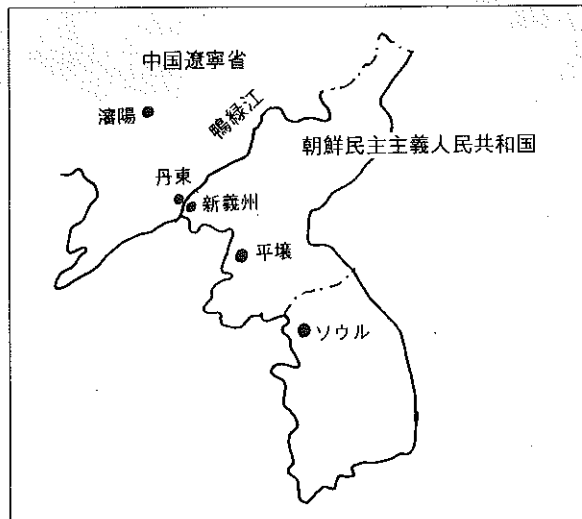
単位：人

	総数	1~9人	10~19人	20~29人	30人以上
建設業	4,618	3,484	5,701	2,102	▲6,669
総合工事業	263	2,483	3,307	1,495	▲7,022
一般土木建築工事業	1,267	120	369	218	560
土木事業(塗装、しゅんせつを除く)	▲1,897	905	2,172	906	▲5,880
塗装工事業	▲235	48	86	101	▲470
しゅんせつ工事業	45	1	7	0	37
建築事業(木造建築を除く)	▲283	247	61	156	▲747
木造建築工事業	1,366	1,162	612	114	▲522
職別工事業(設備除く)	479	▲843	1,287	136	▲101
大工工事業	▲1,787	▲2,141	149	113	92
びび・土・コンクリート工事業	436	238	95	▲60	163
鉄骨・鉄筋工事業	▲140	334	189	▲37	▲626
石・れんが・タイル・ブロック工事業	79	39	▲9	49	0
左官工事業	▲748	▲727	7	▲99	71
瓦葺工事業(金網屋根を除く)	290	124	69	65	32
板金・金物工事業	262	127	96	▲26	65
塗装工事業	658	440	203	42	▲27
その他の職別工事業	1,429	723	488	89	129
設備工事業	3,876	1,844	1,107	471	454

資料：「事業所統計調査」

全国で行われている住宅産業近代化事業の狙いは、地域のビルダーがこの営業力をつけることができるかどうかにかかっている。しかも高齢時代を迎えて、住宅ストックの活用が求められる中、高齢仕様への増改築ニーズなどに対して、小回りのきくのは、やはり長く地元で営業してきた地域ビルダーであり、ユーザーとの信頼関係を築くための自助努力とこれを支援する環境づくりが求められている。(山辺 真一)

鴨緑江の南岸を見る (中国遼寧省丹東市)



●鴨緑江の遊覧船

少し前から、朝鮮半島の中央部から北部にかけて、大雨が降って水害が起こっていることが、日本の新聞にも報じられていた。私たちが中国遼寧省丹東市を訪れた7月31日も、かなりの雨が降っていたし、最近は何が多いということであった。

今回の旅の目的の一つが、鴨緑江を通して朝鮮側を見ることにあったが、丹東市を通りかかりに見たところで、対岸の雰囲気が分かるはずもなく、丹東側のビルから見た、新義州市のクレーンとちょっと小振りな観覧車に、少しほっとしていた。ところが、遊覧船に乗るといふことである。

この雨の中を、増水して泥水の流れる鴨緑江で、何の「遊覧」かと思ったが、何はともあれ船に急いだ。船



われわれの乗った遊覧船と同型のもの(中国側)、2隻出ているのである。建物は新義州側



手前が河の中央で切れている橋
向こう側が現在の橋

鉄骨の橋桁の架かっているところが
岸の高さ、水面から1mぐらいいはあった

樹が水につかっていた
建物の入口に傘をさした人がいる

は小型の漁船程度で、毀れた窓から雨が吹き込んできたが、それほどの雨でもなく、一応喜んで乗り込んだ。

丹東と新義州の間には橋が二つ架かっているが、一方は丁度河の中央あたりで橋桁が落ちていた。1950年の朝鮮戦争のとき、アメリカ軍の爆撃で落とされたのだという説明を受けた。その少し上流側に、自動車と列車用の橋が架かっている。

遊覧船は、その橋を見せてからすぐに、対岸の方へ近づいていった。河幅はおよそ600~700mであり、新義州側の沿岸数メートルのところまで近づくのには時間はかからない。こんなに近づいてもいいのかと思うほど無遠慮に鼻先をなでるように遊覧船が動いていく。気になって聞いてみると、「国境は河川の中央だが、河川の中は上陸しないかぎり岸辺に近づいてよいことになっている。工事をするときには、お互いに通告し合うことになっている」ということである。

●河の水位が気になった

岸辺に近づいて、大きな樹が水につかっていることに驚いた。

そのとき瞬間時に思い出したのが大阪の淀川のことである。昔から淀川は、地域として弱い方の堤防が決壊したそうである。

丹東側は少なくとも、水位が河岸から1mぐらいいは下にあった。新義州側はどこも水がひたひたと寄せてい

た。今の状態なら、大雨で増水したら氾濫するのはこちら側になるだろう。

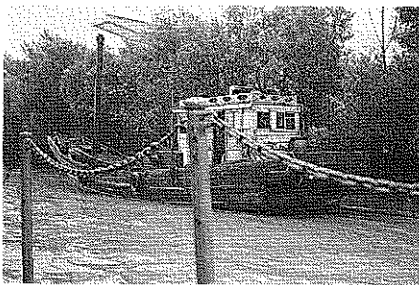
まさか、わざと護岸の高さが変えられたとも思えず、帰ってから調べてみた。

新義州市は鴨緑江の氾濫原に計画的に建設された街で、1906年に京義鉄道がこまで通り、1911年に安東（1965年から丹東）との間に鴨緑江鉄橋が架設されて発展したところと紹介されている。したがって、陸地も低いところが多いのかもしれないが、護岸らしきものがないのも変だと思った。

新義州の人口は28万人ぐらいいで、丹東市67万人の半分ぐらいいである。

丹東市はもど安東と呼ばれていた。遼寧省安東市は、「遼かな地をやすんずる（寧）省の、東に対して中国側を安んずる市」ということである。それでは朝鮮側にもよくないということで、丹（あか）東として、明るい東という意味の地名に、1965年に変更された。昔か

水兵さん



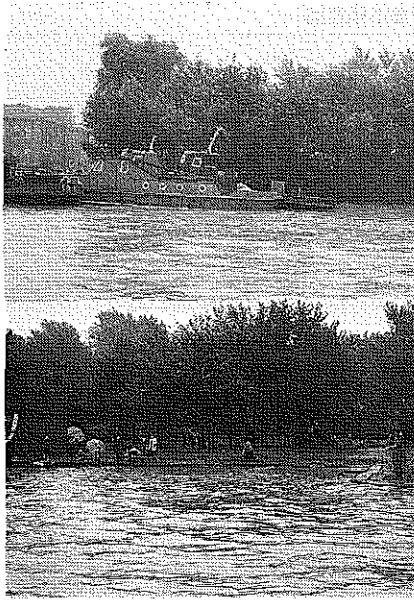
木造船があった
鎖はこちらの遊覧船のもの



北朝鮮側の遊覧船
稼働しているようには見えなかった



北朝鮮側の遊覧船の内部は、椅子が散乱しており、荒れているように見えた



軍船がたくさんあった

岸辺の人たち釣りをしている人もいた(右側)

ら国際的な意味の多いところである。

●垣間見た北朝鮮

突然、木造船を見て驚いた。最近、日本ではFRPのものばかり見ているので、木造漁船は珍しい。かなりの木造船と鉄の船があったが、雨のせいかもしれないことなのかかわからないが、動いていなかった。

大型の豪華遊覧船もあったが、内部は椅子が散乱しており、使っている気配はなかった。

軍人さんがいて、タバコを喫っていた。見かけた人々は20~30人ぐらいだが、そのうち10人ぐらいは陸軍と海軍の兵隊さんである。この国の人たちもタバコをよく喫う。がっしりした体格である。

一般の人々は漁船の人々と岸辺の人々だが、あまり様子はわからない。写真で見ていただく通りである。1人釣りをしている人がいた。(糸乗 貞喜)

津屋崎町に新しくできた農産物直売所

—津屋崎町農業体験実習館オープン—

この施設は、平成5年度に農村と都市との交流を促していくこと、また、町北部で人口が減少している勝浦地区の活性化を図っていくことなどを目的として農業構造改善事業を機につくられたものである。

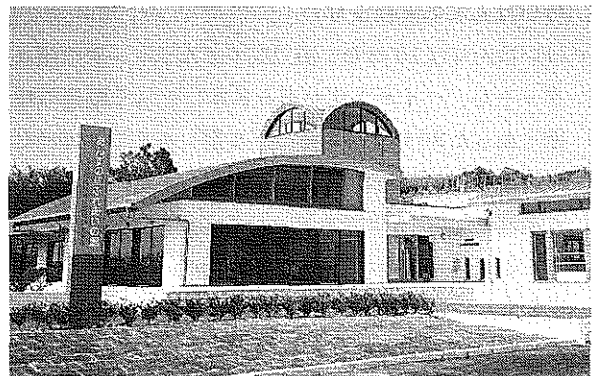
この「津屋崎町農業体験実習館」は、構想づくりから3年後の今年の5月3日にオープンした。場所は勝浦地区「あんずの里運動公園」の隣接地で国道495号に面しており、非常にわかりやすい。構想づくりをお手伝いした関係上、実際の運営等がどのようになっているのか気になっていたもので、早速見にいってきた。

この施設は研修室、体験実習室、加工実習室、交流室などで構成されており、この一画に農産物直売所を設けている。ここの農産物は安くて新鮮であることから盛況のようである。お客さんは口コミで広がり、遠賀町や岡垣町など北九州方面からが多いということである。オープンして3カ月であるが日曜日には1日で1,000千円程度を売り上げることもあるそうだ。

この販売所の運営は、会員数が120名いる「あんずの里市利用組合」で行っており、売り上げの10%をその運営費に当てているとのことである。売場には2人ぐらいのレジ係がいる。

構想づくりの時に悩んだのが、都市との交流づくりの仕掛けをどうしていくかであった。町の方との話し合いの中からは、休耕田を活用した農業体験、農業や食の大切さを一緒に学ぶような農業学校、麦栽培から、製粉そしてパンづくりまでの一連の体験等、いろいろあげられた。

今後は、これらを含めたソフトづくりを具体的に展開



農業体験実習館全景

していくことが大切であり、当施設の真価が問われることになると思われる。(山田 龍雄)

「学術研究都市と計画行政」

日本計画行政学会九州支部久留米大会

■文化とは…やっぱりわけのわからないものだった

「大久保先生の基調講演」より

6月22日久留米大学にておこなわれた日本計画行政学会九州支部の17回大会の基調講演をされた大阪大学名誉教授の大久保昌一先生のお話を報告します。

現在北部九州において学術研究都市（以下学研という）づくりが進められていますが、その先行事例として大久保先生がその計画段階より約18年間係わってこられた「関西文化学術研究都市（以下“けいはんな”という）」を中心に講演されました。

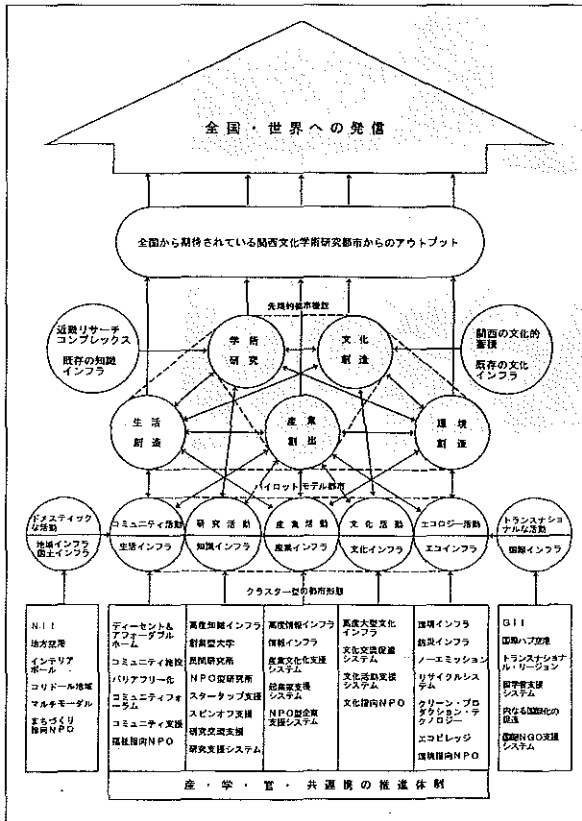
〈先行部隊の貢献〉

- けいはんなの計画を進めるにあたって手本となる計画は多々あった。日本で最初の学研都市である筑波研究学園都市、海外に目を移すと、アメリカのシリコンバレー、シリコンコリドー、韓国のテドック・リサーチタウン、台湾のシンチュウ・サイエンス・インダストリアル・リサーチタウン…etc。後発部隊（けいはんなであり、学研でもある）は先発部隊の悪い手本が有るといって有利である。
- 先発部隊のすばらしい計画には必ずkey Manが存在する。シリコンバレーではスタンフォード大学のプロフェッサー・ターマンであり、けいはんなにおいては大学教授から知事、経済連の会長、国土庁の方々、コンサルタントに至るまで非常に多方面にわたる人々がこの計画のkeyとなっている。

〈けいはんなの実例より〉

- けいはんなは1978年、第二次オイルショックの頃スタートし、ハイテク化が進み日本にとって躍進の時期であった80年代（丁度バブル期）をくり抜けたという時代的背景に恵まれていた。また、ほぼバブル崩壊までの15年間をFirst Stage（以下F.S.という）をとらえると、これからはSecond Stage（以下S.S.という）であり、その方向性を見定めなければならない位置にきている。
- S.S.では、F.S.の成果を評価し、課題を抽出した上で

関西文化学術研究都市概念図



方向を見定め、プランを再提示しなければならない。まず考えられるのが、F.S.では都市を作るというフィジカルな発想が主体であったが、S.S.ではもっと多様なアプローチが必要となってくるということである。例えば、文明学的、都市論的、産業的、エコロジカル的、社会学的、政策論的、戦略的アプローチ…etc.といった。

- また、産官学の連携をうたっているがF.S.では実際のところ特定の（産なら産の）作業には優れているが、違う側面（アカデミックな面、行政面等）からのつっこみが足りないという調査結果も出ている。
- 最後にS.S.に向けての都市の活性化のためには文化という有力なツールをつかわない手はない。文化は富を産出し、積極的に都市のイメージを引き上げる。また、その文化も今までのようにドメスティックなものではなく、都市をマーケティングしていく国際競争力としてのツール、あるいは社会的統合、政治的コンセンサスを形成するツールが必要とされる。テクノロジーオンリーではなく、それを包み込むような文化というのが欠かせないのではないか。そうでなければ、今まで通産省が行ってきたほぼ日本全国

に広がるテクノポリスに逸してしまう。新しい都市は文化なくしては考えられない。しかし、ただ大型の文化施設を導入するのではなく、そこを市民が活用し行政と一緒に文化創造に奮闘する姿が望ましいと考えられる。

以上、大久保先生が熱をいれて語られたところを抜粋しましたが、特に先生は「文化」という点を強調されていました。当社においては「文化の回廊」という福岡県の文化をつなげる仕事がおこなわれていますが、日頃気になっていた「文化」とは？という質問をぶつけたところ、大久保先生から返ってきた答えは、「文化とは、なんやわからん、いいかげんなもんや」でした。芸術や音楽も文化だとは思いますが、例えば、おばあさんが漬物を上手に漬けるのも文化だと思います。一言ではいえず、ひとくりにできない、文化とは、わけのわからない、いいかげんなものなんだな～と思いました。
(澤谷 真紀子)

■九州北部学研都市構想の推進と地方自治体の役割
計画行政学会2日目には、「学術研究都市と計画行政」をテーマに分科会が行われました。このなかから「九州北部学術研究都市構想の推進と地方自治体の役割」について概要をまとめました。

(報告者：福岡県新産業・技術振興課 水上良昭氏)

- 九州北部学術研究都市は7つの拠点地域を中心に、既存の研究機能を活用し、またそこに新たな機能を付加しながら推進を図っている。
- 国では、科学技術基本法が制定され、科学技術の地域での展開が方針として出されており、今後の科学技術推進に対する自治体の役割は大きい。
- 九州北部学術研究都市は、計画の段階から具体化、事業のスタートの時期にきている。福岡県では、科学技術振興財団を強化し推進を図っている。今後は、財団に交流サロンを設置し、将来的には研究プロジェクト実現化のためのコーディネーターも配置していきたい。
- (討論者 (株)九州地域計画研究所 山辺真一)
- 県、7つの拠点地域のなかでも、既存資源、都市機能などだけではなく、科学技術に対する熟度の違いがある。
- 九州北部学研構想は福岡県、佐賀県にまたがっているが、リーダー的存在が必要である。例えば、関西

の場合は3府県にまたがっていたが、推進機構などがあり推進が図られている。

- 東北インテリジェント・コスモスの場合、“走りながら考える”といった、実際にプロジェクトを具体化しながら、環境を整えていっている。九州の場合、計画はあるが、まだ実体が見えてきていない。

これらの報告を受け、参加者も含めて以下のような活発な討論が行われました。

- 九州北部学研構想では、ネットワークをキーワードにしているが、中部圏(愛知、岐阜、三重)でも同じことが言われている。ネットワークといった場合、交通、情報ネットワークが不可欠だが、それだけでは真のネットワークとは言えない。各拠点地域のポテンシャルを相互に促進し合うことが必要である。いつの時点までにこの機能をどのレベルまでに持っていくかという、拠点地域間での責任の分有も必要ではないか。
- 国から地域の科学技術活性化の方針が出されたが、中小都市レベルでは、独自の研究機関を持つには負担が大きく、行政間の温度差はますます広がってしまう。
- 久留米市は、学術研究都市づくりについて短・中・長期の目標を設定し、推進を図っている。
- 福岡県、佐賀県による九州北部学術研究都市推進会議にリーダーシップを発揮して欲しい。

(歌丸 星子)

所員近況

園土を残した北方みずき団地

先日、北九州市小倉南区北方にある改良住宅「北方みずき団地」を見に行ってきた。「北方みずき団地」は建設されて五年ちょっとと比較的新しいが、住民の生活感がこちらにまで伝わる温味のある団地である。団地内には、小さな菜園がいくつかあり、ちょっとした野菜やとうがらし、花などが植えてある。菜園の前の軒下には古いソファやイスが置かれてあり、お年寄りの憩いの場となっている。

みずき団地の外部空間の特色は利用目的をはっきりと定めていない曖昧な空間(土)を多く残しているところにある。(もちろん計画者は、住み手がそこで自主



団地内には小さな菜園がいくつも設けられている

的に緑環境を育成することを期待しているのだろうがその結果、曖昧な空間は居住者によって菜園にされたり、土が舞い上がってくるからとカーペットが敷かれたり、あるいはコンクリートで固められたりと居住者の思うまま自由にいじられている。中には勢いあまってきたか、芝生が植えられていたところまで畑にしているところもあった。実際居住者に聞いてみると芝の草刈がめんどくさいから畑にした、ということであった。また現在通路に敷石が敷かれているが、当初は通路も土のままであったようだ。しかし雨の日足元が汚れるとのことから現在の姿になったのだ。

最近の団地はお洒落で格好はよいが、生活感を感じさせない無機質な物が多いような気がする。そういった団地はびっしり空間の計画がなされていて居住者が自由に扱える空間がない。またそういうところでは誰が住んでも団地の表情に変化はない。一方「北方みずき団地」のように居住者が自由にできる空間が少しでもあれば居住者によって団地の表情がつけられ温かみのある、そして住みよい団地ができるのではないだろうか。設計者が計画できることには限界があるのではないだろうかと思うのである。（七搦 かおり）

■アンケート漬けの毎日です

これまでの「よかネットパーティー」に参加していただいた方を対象におこなっています『「よかネットパーティー」についてのアンケート』が続々と届いています。お忙しいところ時間をさいて回答していただきありがとうございます。殆どの方から「よいパーティー」であるというお誉めの言葉を頂き、楽しく読ませていただいています。また、「ああしたほうがいい」、「こういったやりかたもある」という意見もあり、反省すると同時に「よかネットパーティー」が皆様にかわいがってもらっているな～、と感じています。このアンケートの結果については次号に掲載したいと思います。

タイトルの「アンケート漬け」ですが現在私が抱えているアンケートが3つあります。1つが「よかネットパーティー」、2つめが分譲マンションに関するもの、3つめが博物館に関するものです。3つめの博物館はアンケート票の作成段階なのでただ今勉強中なのですが、他の2つは毎日何十通と返って来ており、一枚一枚広げて回答していただいた方の思いを読みながら、何か内緒の話の聞いているようで楽しみにしています。しかし、分析を思うと…複雑です。（澤谷 真紀子）

■地ビール挑戦中

最近、あちこちで地ビールが話題となっており、地域づくりの目玉になっているところもあるようだ。

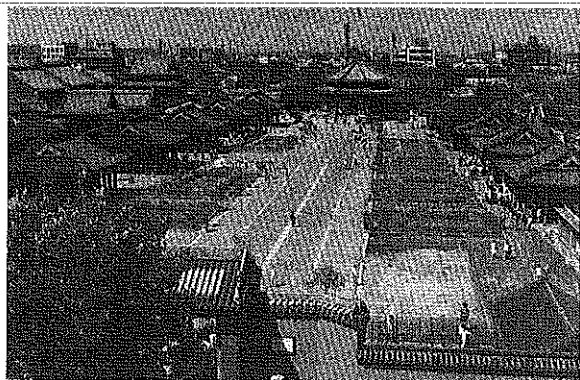
遅ればせながらこのブームに乗った訳ではないが、簡単にできる「ビールづくりキット」を購入し、早速ビールづくりに挑戦している。今1次発酵が済み、2次発酵に入っている段階である。夜はできるだけ冷房した部屋に運ぶなどして温度管理に苦勞しているが、今年のあまりの暑さのため、果たしてうまく発酵してくれるかどうか不安な毎日を過ごしている。人に飲ませられるようなものができたかどうか、次号に報告したいと思う。（山田 龍雄）

■中国遼寧省瀋陽市の修景保全と防災対策

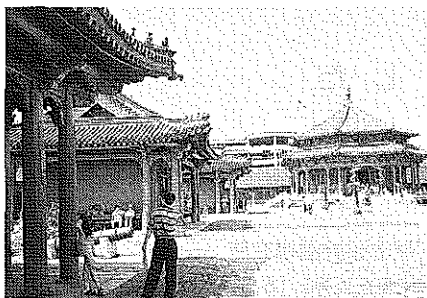
[修景保全]

瀋陽の故宮は、清の太祖ヌルハチと太宗ホンタイジが、北京へ遷都するまでの皇宮である。その故宮が建設ラッシュにとりかこまれている。故宮に入ってゆかりの建物を見回すと、奇妙な建物や工事中の建物がやたらに眼に入る。ガイドマップにのっていた写真と大変な違いである。

「大変だなあ」という質問に対しては、「高層ビル計画が出たが、高層は許可しなかったんだ」という返事



ガイドマップ（中国製）にある写真。ヌルハチの故宮、この左側はホンタイジの故宮。周囲には高い建物はない。

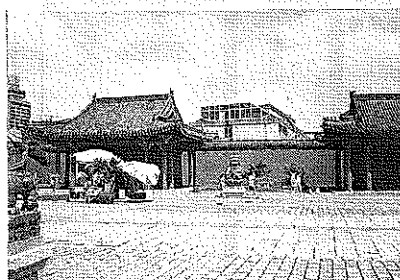
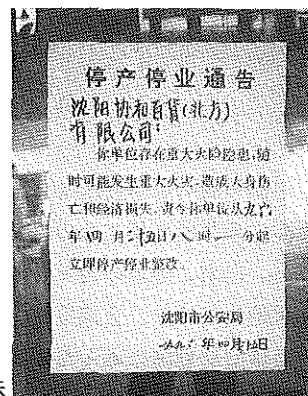


正面がヌルハチの故宮。この手前両側に八旗の建物もある。故宮は八角型になっている。その左に見えるのが工事中の建物で、高さを計画より下げられたということである。



停産停業中の協和百貨公司

停産停業通告の告示



ヌルハチの故宮へ向かって左側の周囲の建物。ガラス窓の部分は後で増築したようだ。ちなみに瀋陽では中高層住宅のベランダは窓で囲ってある。

であった。建築法規のことまでわからないが、「風景のことは十分考えてやっている」というガイドの説明である。

【防災対策】

これは眼ざとく見つけてドアごしに写真をとったものである。私のつたない読解力で述べると、「停産停業通告：瀋陽協和百貨有限公司。重大火災、人身や経済損失のおそれがある。96.4.25より停産停業」ということになっている。（糸乗 貞喜）



「音の晚餐」

林 望 著
集英社文庫
500円

私は食べるのが大好きで、暑い日はしこしこした素麺をさらさらっと、寒い日はホクホクのおでんの里芋フーフーしながら食べるのが、この上ない幸せだと思っている。好きな料理の条件は、味、匂い、歯ごたえ、見た目…、が自分好みであることだと思う。しかしおいしそうと思える料理の条件は、これと少し違うような気がする。実は私は心太^{とこたん}があまり好きではない。しかし食料品売り場に行くとついつい手がのび結局買ってしまふ。透明でツルツルッとしてさらさらと涼しげな心太からは、とてもおいしそうなお音が聞こえるのだ。

林望の「音の晚餐」は、擬声語（オノマトペ）を軸にして、食と料理の話が縦横に広がる遊び心いっぱい

のエッセイ集（と、背表紙に書いてあった）である。

このエッセイからは、「ぱりっ」「ばしゃばしゃ」「ふわふわ」「とろり」などの食べ物のお音がたくさん聞こえてくる。ちなみに「ぱりっ」はせんべい、「ばしゃばしゃ」はどじょう、「ふわふわ」は不思議な卵料理、「とろり」は焼いたマシュマロのお音である。中には「おいしそうな音」とは、ほど遠い「べっとり」血糊がたまっている動物の心臓料理もでてくる。まるごと一冊、珍品、逸品ありの食と料理の話である。

このエッセイには、それぞれの章の後に音にまつわる料理のレシピが載っており、これまたおいしそうなものばかりである。その中で変わったものを一つ紹介したいと思う。料理の名は「あんこまパン」。あんこにマヨネーズで「あんこまパン」なのだ。作り方は至って簡単、サンドイッチ用のパンに薄くバターを塗り、その上に冷たく冷やしたおいしいこしあんを1センチほど塗る。さらにその上にマヨネーズを塗ってできあがり。筆者曰く「マヨネーズの持つ酸味と塩味、バターのコクと風味そしてあんこの甘味と冷たい質感。そしてまたパン、と…。理論的にまずい筈がない。」勇気のある方どうぞお試し下さいませ。（七搦 かおり）

新事務所に引っ越ししました

中洲中島町の事務所から、旧県庁のアクロス福岡の正面に事務所を移したのは、昭和62年10月のことでした。以来、地域の方々とのネットワーク活動、研究会活動のために、会議室を設けていましたが、事務所と会議室が別階にあったため、なかなか満足いくサービスが提供できずに、皆様にもご迷惑をおかけいたしておりました。

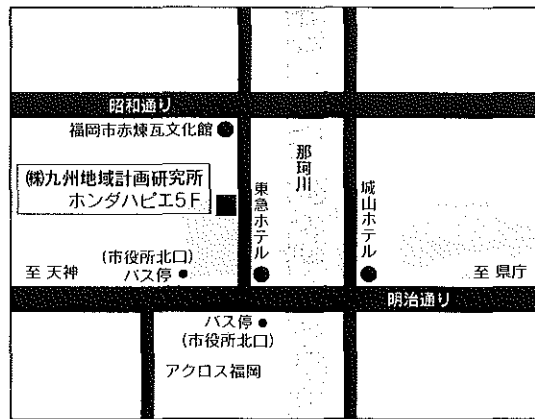
今回移転しましたところは、会議室と事務所をワンフロアーに確保しましたので、以前よりは使い勝手も良く、ネットワーク活動へのサービスも十分に行えるものと思っております。これを機に今後ともより一層のネットワーク活動の充実を図りたいと思っておりますので、会議、研究会等、お気軽にご利用下さい。

なお、新事務所の場所は、以前の事務所の入口の前の通りを北側（昭和通りの方）へ約30メートル移動したところにあります。

株式会社 九州地域計画研究所

〒810 福岡市中央区天神1-15-35 ホンダハビエ5F

TEL 092.731.7671 FAX 092.731.7673



編集後記

5月に事務所移転を決定してから、いろいろとところを探しましたが、前事務所のような足回りの良い場所がなかなか見つかりませんでした。ところが“灯台下暗し”で、ほんの30メートル先に希望に合った物件があり、即時決定した次第です。

今号の冒頭に掲載したNIRAの研究レポートに関する報告で一連の報告を終了いたします。なお、ようやく研究レポート本体の印刷が8月末に出来上がりましたので、ご希望の方は連絡して下さい。

NIRAの報告に対しては、多くの読者の方々からも、「最近が高齢問題に凝ってますね」とか「高齢者の次のテーマは何ですか」とか聞かれましたが、高齢者問題はまだ始まったばかりで、今後も取り組みたいと思います。

高齢問題だけでなく、日々の暮らしの中でも、福岡の方では、新聞に毎日のようにどこかの市町村のゴミ問題など、水問題に加えて、廃棄物問題も待ったなしの状況に来ているようです。人口、世

帯の受け皿として、上下水、廃棄物などのインフラは不可欠なものであり、今まさに産学官、市民が一体となって、この問題を解決していくことが求められていると思います。(べ)

よかネット NO.23 1996.9

(編集・発行)

(株)九州地域計画研究所

〒810 福岡市中央区天神1-15-35 ホンダハビエ5F

TEL 092-731-7671 FAX 092-731-7673

(ネットワーク会社)

(株)地域計画建築研究所

本社 京都事務所

TEL 075-221-5132

大阪事務所

TEL 06-942-5732

名古屋事務所

TEL 052-962-1224

東京事務所

TEL 03-3226-9130